Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-09

日本語学習者の「カモシレナイ」の使用実態について : 婉曲表現としての「カモシレナイ」を中心に

崔, 艶鵬

(Citation)
国際文化学,36:26-42

(Issue Date)
2023-03-20

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100479395

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100479395

日本語学習者の「カモシレナイ」の使用実態について

―婉曲表現としての「カモシレナイ」を中心に―

The Use of *Kamoshirenai* by Japanese Language Learners: Focusing on the Euphemistic Usage

崔　艶鵬
Yanpeng CUI

Summary

Although euphemisms are used by native Japanese speakers on a daily basis without being aware of them, most Japanese language learners find it exceptionally difficult to use them. This paper focuses on the use of *kamoshirenai* as a euphemism and compares its use between native Japanese speakers and Japanese language learners so as to clarify the actual usage of Japanese language learners. The results of this paper showed that less than 10% of the Japanese language learners use *kamoshirenai* as a euphemism, compared to approximately one-third of native speakers. Even when used euphemistically by Japanese language learners, they are limited in terms of Japanese language proficiency, meaning-usage and use in situations. If we see it from the perspective of Japanese language proficiency, the use of euphemism mainly occurred among intermediate level learners and above and there were only a few cases of its use by beginner and intermediate level learners. In terms of meaning and usage, [A-2 I Advance Notice a] (expressing consideration for the listener's private territory) and [A-2 II] (expressing supplementation or concession) were rarely used. Finally, regarding usage situations, Japanese language learners tended to use *kamoshirenai* in combination with words that convey negative meanings such as "muri" in the "refusal" task, where native speakers used other euphemisms.

キーワード

カモシレナイ、日本語学習者、婉曲表現、対人的機能、使用実態

1 はじめに

「カモシレナイ」は、例 1 のように、「命題が真である可能性がある（可能性判断）」[1]ことを表すモダリティ形式であるが、例 2 のように、断りの場面の中で用いられると、可能性を判断しているとは言いがたいように思われる。例 2 の「無理かもしれない」は、カラオケに行くことの可能性を述べているのではなく、カラオケに行けないことを婉曲的に表現している。本研究では、このように用いられているカモシレナイを「婉曲表現としてのカモシレナイ」とする。

（1）あしたは雨が降るかもしれません。

（2）太郎：「今日、カラオケに行かない？」
　　花子：「明日、バイトがあるから、ちょっと無理かもしれない」

婉曲表現としてのカモシレナイには、「対人的配慮に基づき主張の抑制・断定回避」（蓮沼 2017）などといった特徴があり、例 2 のような断りの場面以外にも、コミュニケーションを円滑にさせることがある。例えば、衝突が生じやすい「議論」では、相手と異なる意見を述べようとするときに、「そういう考え方もあるかもしれませんが、…」という表現を用いると、相手の発言の一部を認めながら本音を言うという構造になり、相手との衝突を避けることができる。また、「議論」に限らず、自ら発言する場合でも、これから述べることについて聞き手から否定的に評価されそうな不安があれば、例 3 のようにカモシレナイを用いた前置きをすることで自己防衛ができる。

（3）「ちょっと変かもしれませんが、私は新しい靴のにおいが好きです」

このような使用実態に基づいて考えると、婉曲表現としてのカモシレナイが適切に使えるようになれば、日本人とのコミュニケーションにおいて不必要な摩擦を避けることができると思われる。しかし、日本語学習者（以下、学習者とする）の産出物においては、カモシレナイの基本的な意味が中心となっており、婉曲表現としてのカモシレナイはあまり使用されていないように思われる。そこで本研究では、学習者による婉曲表現としてのカモシレナイの使用実態について明らかにすることを目的とする。具体的には、実際のコミュニケーションにおいて、学習者の日本語能力別、カモシレナイの意味・用法別、カモシレナイが使われる場面（タスク）別に、学習者が婉曲表現としてのカモシレナイを使用しているのか、また、使用している場合、どのように使用しているのかを明らかにする。

以下、第 2 節では、婉曲表現としてのカモシレナイに関する先行研究、学習者によるカモシレナイの使用実態に関する先行研究を概観する。第 3 節では、本稿で用いる調査対象および調査資料について説明した後、婉曲表現としてのカモシレナイに関する本研究の立場について述べる。第 4 節では、学習者の日本語能力別、カモシレナイの意味・用法別、カモシレナイが使われる場面（タスク）別に、学習者の使用実態について考察した結果を述べる。

最後に、第 5 節では本稿の内容をまとめ、今後の課題について述べる。

II　先行研究

2.1 婉曲表現としてのカモシレナイに関する先行研究

語用論の観点から婉曲表現としてのカモシレナイについて、その意味・用法、機能に関する研究が盛んに行われている（平田 2001、麻生 2002、國澤 2013、山岡 2016、蓮沼 2017 など）。平田（2001）は「『カモシレナイ』の意味は、『推し量り』から派生・拡大し『婉曲』に意味をもたせることができる」(p.61）と述べ、カモシレナイの婉曲用法を「間接的表現」「疑似的同意」「前置き」の三つに分類する。そして、ポライトネス理論を用いて用例を分析し、カモシレナイの婉曲用法は「対話場面において、話し手が聞き手の積極的または消極的フェイスを威嚇せず、それらを維持するためのポライトネスとしての役割を果たしている」(p.65）と述べている。國澤（2013）は、平田（2001）の「間接的表現」「疑似的同意」「前置き」という下位分類を参考にし、「『カモシレナイ』は命題内容が不確実な場合には推量用法として用いられ、命題内容が確実であるには婉曲用法として用いられて相手への配慮を表す」(p.6）と述べている。

一方で、カモシレナイの基本的意味を「可能性判断」とし、婉曲表現として使用されるカモシレナイは「対人配慮用法」とする山岡（2016）が挙げられる。山岡（2016）は、ポライトネス理論などを用いて、カモシレナイを「可能性判断用法」と「対人配慮用法」に分け、さらに下位にある意味・用法も含めてそれぞれの論理的意味、構造的特徴、情報の認知空間の領域の違いについて考察を行っている。蓮沼（2017）は山岡（2016）などを参考にし、婉曲表現として使用されるカモシレナイを「文末用法」と「前置き用法」に二分し、「前置き用法」をさらに「話し手の認識に対する前置き」、「聞き手の認識に対する前置き」、「話し手の発言に対する前置き」の三つに分類した。

ここまでの研究は、婉曲表現として使用されるカモシレナイを「婉曲用法」とするものが多いが、「婉曲用法」という命名そのものを批判する立場もある。川口（2003）は、カモシレナイの婉曲用法という命名を批判し、平田（2001）の研究で「疑似的同意」と呼ばれるものはカモシレナイの婉曲用法ではなく、反論を行う場面で、よりやすく議論を展開していくための「コミュニケーション機能」であると主張する。また、麻生（2002）も同様に、カモシレナイが婉曲表現として使用される際の機能に注目し、カモシレナイを「事実や自分自身の判断・意見等の表明回避」、「弁解」、「譲歩・妥協」、「自己の客観化」、「皮肉」、「受け流し」という六つの機能に分類し、コミュニケーションにおける摩擦を避ける言語形式であるとしている。

2.2 学習者によるカモシレナイの使用実態に関する先行研究

これまで、学習者によるカモシレナイの使用実態について述べたものは少なく、管見の限り、高木（2017）の一編のみである。高木（2017）は、KYコーパスをデータベースとして、日本語母語話者（以下、母語話者とする）による「ソウカモシレナイ」の対話における機能について考察を行ったものである。また、日本語教科書におけるカモシレナイの扱い方と、

学習者によるカモシレナイの使用状況についても調査を行っている。その結果、学習者はカモシレナイ自体の使用が少なく、カモシレナイは「使いこなせるまで時間のかかるものであるかもしれない」と結論づけた。しかし、高木（2017）では、学習者によるカモシレナイの使用実態が数の統計にとどまっており、使用上の特徴についてまでは触れられていない。本研究では、量的な側面だけでなく、学習者がカモシレナイをどのように使用しているのかといった質的な側面にも注目し、考察を行う。

III　研究方法

3.1 研究資料

本研究では、「学習者が使っているカモシレナイは、その基本的な意味が中心となっており、婉曲表現としてのカモシレナイはほぼ使用されていない」という仮説のもと、母語話者の使用実態と比較しつつ、学習者の使用実態について考察を行う。考察に用いた調査資料および調査対象は以下のとおりである。

まず、調査資料について述べる。婉曲は、聞き手がいることで成立するものであるため、本研究では、会話コーパスをデータベースとして調査を行い、同じ状況のもとで母語話者によるデータも収集・収録している『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』(I-JAS) を利用し、データを収集した。I-JAS には多様なタスクが収集・収録されているが、相手が存在している「対話」、「ロールプレイ」というタスクのみを調査対象とした。「対話」では、前半は、過去(幼少期の体験、怖かった経験など)、現在(日本語学習の動機、出身地の産物など)、未来(将来の夢など)について話せるものが設定されており、後半は、「談話レベルの発話が引き出せるよう、意見陳述や反論ができるような話題」（迫田ほか 2020:37）が設定されている。また、「ロールプレイ」は、日本料理店でのアルバイト場面を設定し、店長にアルバイトの出勤日数の変更を依頼するものと、店長からの仕事内容の変更依頼を断るものといった 2 種類のタスクから構成されている。反論や依頼への断りといった場面設定は、婉曲表現としてのカモシレナイが現れやすい状況であると判断した。なお、検索方法としては、オンライン検索アプリケーション「中納言」を使用し、文字列検索を用いて「かも」をキーワードとして検索した。「鴨」「～とかも」のような分析対象外の例を除き、学習者による 1054 例、母語話者による 201 例を分析対象とした。

次に、調査対象について述べる。本研究では、海外教室環境の学習者および国内教室環境の学習者（950 名）[2]と母語話者（50 名）を調査対象にした。I-JAS では「J−CAT」、「SPOT」という 2 つの言語テストが使用されている。本研究では、学習者のレベルがより細分化されている「J−CAT」[3]を基準に、学習者の日本語能力の区分を行った。なお、本文中の例文については、I-JAS から収集したものについては、各々の例文の末尾に、調査対象者の整理番号及び調査項目を付す。例文の冒頭にある＜C＞は協力者による発言を意味し、＜K＞は研究対象による発言を意味する。また、各々の例文の末尾に、調査対象者の整理番号及び調査項目を付す。頭文字である C 、E、 F、 G、 T は、母語がそれぞれ中国語、英語、フランス語、ドイツ語、タイ語であることを意味し、J は母語が日本語であることを意味する。

3.2 婉曲表現としてのカモシレナイに関する本研究の立場

本節では、婉曲表現としてのカモシレナイの捉え方に関する本研究の立場をまとめることにする。

本研究では、婉曲表現としてのカモシレナイについて、仁田（1992）、蓮沼（2017）を参考にし定義を行う。仁田（1992）は、婉曲表現全般を「話し手は言表事態の成立が真であると認識している」、「言表事態が未だ確認されていないところを有するものとして表現されている」といった 2 つの要件を満たすものと説明している。また、蓮沼（2017）は婉曲表現としてのカモシレナイは、「話し手が実態を確実に把握しているにも関わらず、対人的配慮に基づき主張の抑制・断定回避や品位ある人物として自己イメージの保全などの意図」で使われると指摘している。

本研究では、婉曲表現としてのカモシレナイは、コミュニケーションにおける対人的な機能を有し、対人的ストラテジーとして使われているものとし、図 1 に示す分類の元で考察する。これまでの先行研究では、意味、機能の観点で婉曲表現のカモシレナイの下位分類がなされているが、本研究では、先行研究での分類も参考にしながら、構文に見られる特徴という観点で婉曲表現としてのカモシレナイの下位分類を行った。図 1 からわかるように、カモシレナイは、「可能性判断」といったカモシレナイの基本的な意味を有しながらも、ある特定な言語環境で、「対人的配慮」「自己防衛」を図る手段となり、婉曲表現として使われる。構文に見られる特徴からは、婉曲表現としてのカモシレナイは【A】、【B】に分けられる。この中には、事柄の可能性を表さず婉曲的な表現になる場合、可能性が残っている言い方をとることによって丁寧さを示す両方が含まれる。

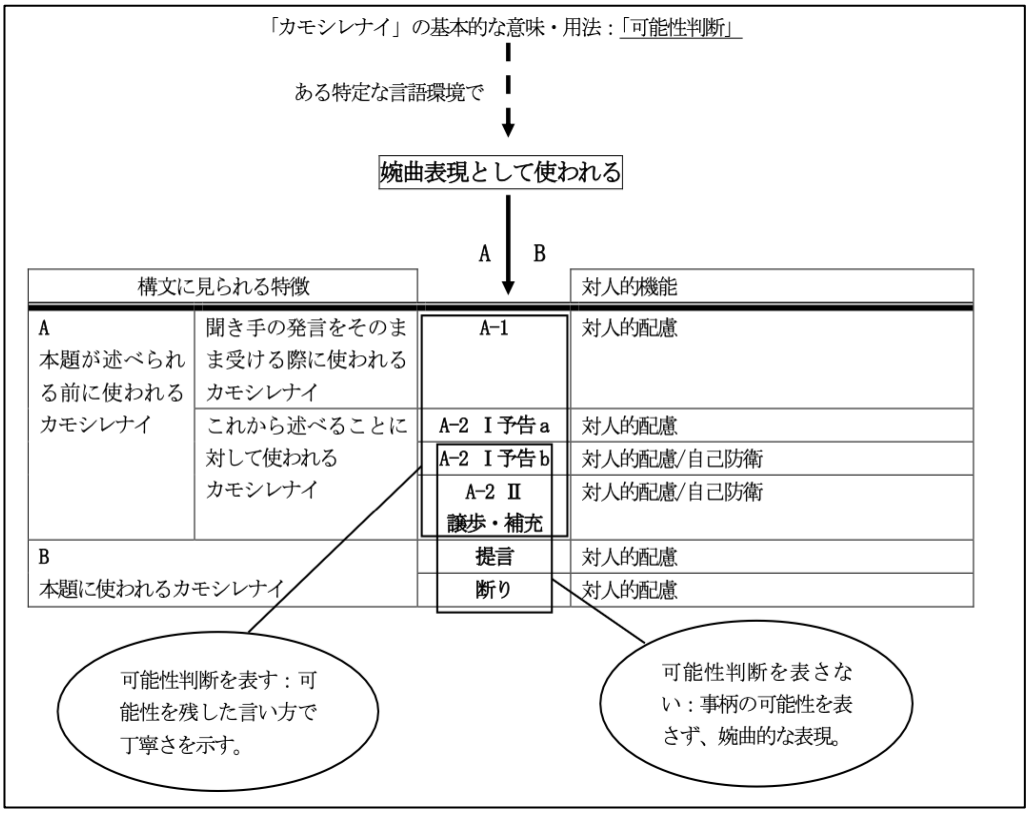

図 1．婉曲表現としてのカモシレナイについて

次に例文を挙げながら婉曲表現としてのカモシレナイの【A】、【B】について詳しく述べる。なお、本節における例文は、筆者が文学作品などから直接収集したものである。用例出典は、末尾の「調査資料及び用例出典」を参照されたい。

①本題が述べられる前に使われるカモシレナイ－【A】

「～カモシレナイガ、…」の形で本題（本当に言いたいこと、自己主張）を伝える前の従属節に使われ、自己防衛や聞き手への配慮といった機能を有している。【A】は、さらに【A−1】、【A−2】に分けられる。

【A−1】: 聞き手の発言をそのまま受ける際に使われるカモシレナイ

例 4 のように、聞き手の発言が真であると思っていると聞き手に見せかけ（聞き手の発言の一部を認める場合もある）、聞き手の発言に反論する自己主張を行うカモシレナイである。このタイプは、聞き手の発言をそのまま受け、形式的に、2 つのタイプにさらに下位分類される。一つ目は、聞き手の発言の一部を直接にあるいは概括的に繰り返すタイプである。そして、二つ目は、「ソウカモシレナイ」のように聞き手の発言全体を指示語で受けるタイプである。「ソウカモシレナイ。」で文が一回終止し、「デモ」などといった逆接の接続詞で後の文につないでいるものも【A−1】に該当する。【A−1】は、カモシレナイの基本的な意味である可能性判断として見ることもできるが、単に反論する前のクッション言葉として用いられていると見ることもできる。

（4）加納「男子は十九歳の時に、女子は十七歳の時に人生に於いて非常に大きな何かがある」（中略）

A「女子の方の十七の法則はそうかもしれないが、男子の方の十九の法則は、少なくとも、最近では違うだろう。というのは、今の男はどんどん精神的に低年齢化していて、十九になっても何も自分の人生なんか決められない、むしろ三十五ぐらいでやっと決められるんじゃないか」

『二十歳のころ』: 50

【A−2】: これから述べることに対して使われるカモシレナイ

【A−2】は、自己主張を行う前に、予告、譲歩・補充などとして使われるカモシレナイである。【A−2】では、カモシレナイを取り去ると文が成立しなかったり、本来の機能を果たせなくなるものがある。【A−2】のカモシレナイは「可能性判断」といった基本的な意味を持ちながらも、自己主張を行う前の前置きとして対人配慮や自己防衛といった婉曲的な機能を持っている。

Ⅰ「予告」[4)]

予告として使われるカモシレナイは、発話の冒頭で現れ、「予告 a：聞き手の私的領域への配慮」と「予告 b：これから述べることの評価を前もって述べる」にまとめられる。

予告 a：聞き手の私的領域への配慮

「聞き手の感情・感覚・知識など、聞き手の内面の認識状態（蓮沼 2017：13)」に対する話し手の推測を注釈的に述べ、聞き手の私的領域への配慮を表すものである。この用法は、聞き手の私的領域への配慮を払いつつ、聞き手の私的領域に踏み込んだ補償を行っている。「予告 a」では、例 5b のように「お笑いかもしれません」を断定形にすると文が成立しなくなる。

（5）a.　PC 初心者です。ばかな質問だとお笑いかもしれませんが、お願いします。

（蓮沼 2017：13（例 17））

（5）b.？PC 初心者です。ばかな質問だとお笑いですが、お願いします。

予告 b：これから述べることの評価を前もって述べる

従属節で述べられる「話し手の認識、発言の情報価値、発言態度、発言内容、表現方法（蓮沼 2017：13)」などの適切性について、話し手自らの評価を前もって述べ、ほとんどが自己防衛の意図を含んだ前置きである。「予告 b」では、例（6b）（7b）のように断定形にすると文が純粋の逆説に変化し、自己防衛としての機能が弱まる。

（6）a. また、気が早いかもしれませんが、新型スイフトにスポーツモデル（JWRC スイフトレプリカ）をラインナップに加えて欲しいです！もちろん、スイスポに関しては現行がかなり気に入ってます！

（蓮沼 2017：13（例 13））

（6）b. また、気が早いですが、…

（7）a. 徳永「余計なお世話かもしれないけれど、平凡な言い方が許されるならば、ただ幸せになって貰いたいのだ」

『火花』：162

（7）b. 余計なお世話だけれど、…

Ⅱ.「譲歩・補充」

譲歩・補充では、話し手が発言内容などについて論理性・適切性に関連し、厳密ではない部分、例外・矛盾などがあることを意識し、相手に指摘されそうなところを「譲歩」「補充」などの意図で前もって述べる。前もって述べる目的は、発話の論理性などの保全である。「まあ」のような間投詞とともに使われるものが多く、必ずしも発話の冒頭で現れるとは限らない。「譲歩・補充」は「予告 b」と同様に、カモシレナイを取り去っても文は成立するが、自己防衛としての機能が弱まる。

（8）店長「白羽さん、遅刻遅刻！五分前には制服着て、朝礼してないと駄目だから！あと、朝の朝礼はしっかりね！！事務所のドアあけるとき、元気よく挨拶！それとさあ、休憩中以外は携帯禁止だから！レジの中に持ち込んでるっし

ょ？見てるからねー！」

白羽「あ……はあ、すみません……」白羽さんが目に見えて狼狽する。（中略）

店長「カメラカメラ！俺は夜勤のときもちゃんと昼勤のこと見てるからね！！まあ、携帯の事はルールとしてちゃんと説明してなかったかもだけど、駄目だからね！！」

白羽「あ、はあ、知らなかったです、すみません……」

『コンビニ人間』: 68−69

②本題に使われるカモシレナイー【B】

「自己主張＋カモシレナイ」のように、本題とともに使われるものである。断定的に言ってもいいところにカモシレナイを使うことによって、間接的に意思伝達を行い、聞き手に対して丁寧さを示す。【B】では、カモシレナイを取り去ると対人的配慮の機能を果たせなくなる。【B】は、とりわけフェイス侵害行為（Brown & Levinson1987)が生じやすい場面でよく使われる。以下、「提言」「断り」の場面を例に説明する。

Ⅰ.提言：話し手が自らの意見、主張、提案などを述べる際に、カモシレナイをとることによって、断定の言い方から生じうる命令のイメージを解消し、対人的配慮を示す。

(9) 岩淵「まさか。天才に見えます、あの人？そうじゃなくて、波乱万丈な人生歩んですよ。新聞に載るっていったら、事件とか事故とかなんじゃないですか」

ケチャップのついた指をなめながら、得意気に岩淵さんは言った。小夜子はさらに訊こう口を開いたが、しかしそれより先に店内の時計が目に入った。

小夜子「岩淵さん、そろそろ戻ったほうがいいかもしれない」

『対岸の彼女』: 61−62

Ⅱ. 断り：聞き手の誘い、依頼などを断る際に、はっきり断る言い方をしないかわりに、間接的な表現で聞き手に断りの意を察してもらい、聞き手に対して丁寧さを示す。

(10) 太郎：「今日、カラオケに行かない？」

花子：「明日、バイトがあるから、ちょっと無理かもしれない」

（例 2 再掲）

本稿では、これまで述べたカモシレナイを「婉曲表現」とする。それ以外のカモシレナイは、基本的な意味としてのみ使われているカモシレナイとし、「婉曲表現ではない」として記す。

上で述べた基準のもとで、考察対象となったカモシレナイを「婉曲表現ではない」、「婉曲表現」別に示すと次の表 1 のようになる。なお、意味・用法の判定がつきにくいものは「その他」[5]として分類した。また学習者の使用例については、接続の仕方などにおいて形態的な誤りが見られても、意味・用法の判断が可能であったものについては考察の対象にした。

表 1. カモシレナイの使用実態

	学習者（950 名）		母語話者（50 名）	
	出現回数	使用人数	出現回数	使用人数
婉曲表現ではない	974 (92.4%)	397 (41.8%)	159 (79.1%)	44 (88%)
婉曲表現	76 (7.2%)	62 (6.5%)	39 (19.4%)	22 (44%)
その他	4 (0.4%)	4 (0.4%)	3 (1.5%)	3 (6%)
総計	1054 (100%)		201 (100%)	

学習者によるカモシレナイの使用のうち、婉曲表現としてのカモシレナイが占める割合は 1 割未満であり（総計 1054 回のうち 76 回で 7.2%）、これは母語話者の使用率（総計 201 回のうち 39 回で 19.4%）の約 3 分の 1 である。また、実際にデータを確認したところ、学習者と母語話者のいずれにおいても、婉曲表現としてのカモシレナイを使っている人であれば、カモシレナイの基本的な意味も使っていることがわかった。そのため、婉曲表現か婉曲表現ではないかは区別せず、カモシレナイという表現を使っている人数は、学習者 950 名のうちの 397 名（41.8%）であり、母語話者 50 名のうち 44 名（88%）である。つまり、婉曲表現としてのカモシレナイ以前に、カモシレナイという表現自体を使っていない母語話者は 1 割程度（12%）存在しているのに対して、学習者の場合は、半分以上（58.2%）も存在している。ここからも、学習者が婉曲表現としてのカモシレナイをあまり使っていないと予測できる。実際に、婉曲表現としてのカモシレナイに注目してみると、カモシレナイを使っている 397 名の学習者のうち、62 名（15.6%）の学習者が婉曲表現としてのカモシレナイを使っており、これは母語話者の 44 名のうちの 22 名（50%）に比べて少なく、使用人数の割合に 3 倍の差が見られた。カモシレナイを使っている母語話者のうち半数が婉曲表現としてのカモシレナイを使用していることから、このようなカモシレナイは日常会話でも使用頻度の高い表現だと思われる。それに比べて学習者は、カモシレナイそのものを使っている人は 4 割ほどに留まっており、また、カモシレナイの基本的な意味を使っている人であっても、婉曲表現としてのカモシレナイも使いこなせるとは言えない。

以下、母語話者の使用実態と比較しながら、学習者の婉曲表現として使用されるカモシレナイの使用実態について詳しく述べていく。

Ⅳ　学習者の使用実態について

本節では、まず、日本語能力別に学習者の婉曲表現として使用されるカモシレナイの使用実態について述べる（4.1）。そして、母語話者の使用実態と比較しながら、意味・用法別に学習者の使用に見られる特徴をまとめ（4.2）、使われる場面（タスク）別に見られる特徴を最後に述べることにする（4.3）。

4.1 学習者の日本語能力別に見られる特徴

表 2 は、学習者による婉曲表現としてのカモシレナイの使用実態を日本語能力別に示したものである。全体的な傾向として、婉曲表現としてのカモシレナイは、初級から中級までの学習者による使用はわずかしかなく、中級後半から増加し、上級前半の学習者による使用が最も多い。レベル別に見ると、学習者の総人数が中級で最も多いにもかかわらず、婉曲表現としてのカモシレナイの使用率は 306 名のうち 7 名である。中級後半の学習者は中級より少ないものの、婉曲表現としてのカモシレナイの使用率は 283 名のうち 20 名（7.1%）であり、この使用率は中級の倍以上に上った。上級前半になると、人数は中級の半分程度だが、婉曲表現としてのカモシレナイの使用率は 152 名のうち 22 名であり、使用率はさらに上がってくる。このように、レベル別に見ても婉曲表現としてのカモシレナイの使用は、より習熟度の高い学習者に集中していることがわかる[6]。

表2. 日本語能力別に見る使用実態

レベル	総人数	使用人数（実人数）	総人数に占める使用者の比率	出現回数
初級	33	0	0	0
中級前半	134	3	2.2%	3
中級	306	7	2.3%	7
中級後半	283	20	7.1%	24
上級前半	152	22	14.5%	27
上級	39	9	23.1%	13
母語話者相当	3	1	33.3%	2
合計	950	62	6.5%	76

また、学習者による使用実態を、用法別に見ると、次の表 3 のようになる。

表3. 日本語能力別に見る使用実態の内訳

レベル	【A】		【B】
	【A−1】	【A−2】	
	出現回数（使用人数）	出現回数（使用人数）	出現回数（使用人数）
初級	0	0	0
中級前半	2(2)	0	1
中級	2(2)	2(2)	3
中級後半	11(11)	6(5)	7(6)
上級前半	7(6)	14(13)	6(5)
上級	3(3)	6(4)	4
母語話者相当	1(1)	1(1)	0
合計	26(25)	29(25)	21(19)

表 3 からもわかるように、学習者による婉曲表現としての「カモシレナイ」の使用は少な

くはあるものの、【A】、【B】のいずれにおいても、学習者の習熟度の向上につれて使用例が見られるようになる傾向にある。一方、【A−1】と【B】では、学習者の用例は中級後半〜上級に分布しているのに対して、【A−2】では上級前半の学習者に使用が偏っている。また、一人の学習者が複数回使用していることもあったため、実際の使用人数は、使用回数よりも少なくなる。複数回使用している学習者 12 名のうち、中級後半の学習者は 4 名、上級前半の学習者は 5 名、上級前半の学習者は 2 名、母語話者相当の学習者は 1 名であった。

4.2 意味・用法別に見られる特徴

この節では、意味・用法別に、母語話者の使用実態と比較しつつ、学習者の使用実態に見られる特徴について述べる。学習者によって使われている用例を【A】、【B】別に分けると表 4 のようになる。表 4 に示すように、出現回数、使用人数を問わず、学習者と母語話者のいずれにおいても、【B】より【A】のほうが多く使われている。なお、表 4 で示す使用人数の総計は、それぞれの延べ人数を表す。学習者の実人数は 62 人(950 人のうち)であり、母語話者は 22 人（50 人のうち）である（表 5 についても同様)。

表4. 婉曲表現としてのカモシレナイの使用実態

				学習者		母語話者	
				出現回数	使用人数	出現回数	使用人数
【A】	【A−1】			26 (34.2%)	25 (36.2%)	10 (25.6%)	9 (27.3%)
	【A−2】	予告	評価	28 (36.8%)	24 (34.8%)	9 (23.1%)	7 (21.1%)
			私的領域	0	0	5 (12.8%)	4 (12.1%)
		譲歩・補充		1 (1.3%)	1 (1.4%)	6 (15.4%)	5 (15.2%)
【B】				21 (27.6%)	19 (27.5%)	9 (23.1%)	8 (24.2%)
総計				76 (100%)	69 (100%)	39 (100%)	33 (100%)

婉曲表現として使用されるカモシレナイのうち、学習者、母語話者のいずれにおいてもより多く使われているのは【A】であるが、次のような違いが見られる。

まず、学習者が用いている【A−2】では、例11のように、後述する本題に関連し、自己「評価」や発言内容に対する「評価」を先にまとめて予告をし、「変」「おかしい」「悲しい話になる」「わがままな感じになる」などといった消極的な「評価」とともに使われる例が多く見られる。また、例12のように、あることについて詳しい説明が求められる場面では、力を尽くして説明しても聞き手がわかってくれない可能性を話し手が予測し、うまく説明できないことを予告する例が多く見られる。学習者による【A−2】の用例は、「他者に受け入れられたい・よく思われたい」といったポジティブ・フェイス（Brown & Levinson 1987)を保つための「予告」がほとんど（85.7%）であった。

（11）<C>「そのＣＳさんが日本語を勉強しようと思ったきっかけって何なんですか？」
<K>「そして、あの、あの、きっかけはちょっと変かもしれませんが、ある日は、あーんとー、あのー、私はー、友達のために翻訳したいと思います」
（CCS50）（対話）

（12）<C>「えっとそれはどんなお話だったか覚えていますか」
<K>「えっと猫お願い、『猫のお願い』はちょっとー、あーし、話はーちょっと、長くてー、説明することは、難しいかもしれませんけど、えっとー、普通の女の子は、あー猫を助けてあーあ、たっあ、あだ手伝います。（…後略）」
（ENZ48）（対話）

一方、母語話者は、評価に関する「予告」のほかに、例 13 のような、聞き手の私的領域への配慮に関する「予告」も使っていた。上で述べたように、中級後半以上の学習者の用例では、婉曲表現としてのカモシレナイの使用が見られていた。しかし、「聞き手の私的領域への配慮」という文化に関連する用法の使用は見られなかった。学習者は、カモシレナイの「聞き手の私的領域」に踏み込んだ補償を示すものを使っていないことから、日本語の環境での「聞き手の私的領域」とは何かがコミュニケーション教育の重要なポイントを示しているように思われる。

（13）<C>「食べ物はどうですか？」
<K>「食べ物もですね。すいません、これも期待に反するかもしれませんが、あんまりおいしくはないんですよ」
（JJJ49）（対話）

また、より長い発話の冒頭で使われる「予告」のほかに、母語話者による【A−2】の用例では、例 14、15 のような「譲歩・補充」を表すものも見られた。例 14 では、話し手<K>は「東京で住んでいるが、都心ではなく、より田舎のほう（地域）に住んでいる」という主張をもっており、「最近は（住んでいるところで）けっこう企業もある」という主張とは反する事実を意識している。そこで、カモシレナイを用いて「譲歩」をし、発話の論理性を保とうとしながら、自己主張を行っている。また、例 15 では、観光名所の紹介が要求された文脈で、話し手が推薦しようとする場所は、聞き手に求められていない答え（観光ってゆうよりは食べ歩き）になる可能性を意識し、自ら不適切な点を前もって述べて譲歩をし、聞き手への配慮を示しつつ、自己主張（紹介したい場所を述べること）を行っている。このような「譲歩・補充」を表すものは、学習者の用例においては 1 例（1.4%）しか見られなかった。

（14）<C>「江東区ってどこ？」
<K>「あの隅田川ってわかりますか」
<C>「ああ下、下町の、あの」（…中略）

<K>「下町だから、まあちょっとがやがやしてるといえばそうだけどあ、あの人があの、住居地域ですよね。とかあってもこうまあ、最近はけっこう企業もいるかもしれないけど、やっぱ都心ほどではないと思うんで、昔ながらのまあ地域といえば地域ですよね」

<C>「んー古い感じの」　(JJJ43)（対話）

（15）<C>「あー、だまあ東京じゃない方に、東京でぜひここ、ってゆうとー、観光名所とかだとどこになります？」（中略…）

<K>「そうなんですねー、で結構メディアに出てるようなお店も好きで、私も出かけてったりするんですけど、うんなんかあの辺は、まあの観光ってゆうよりは食べ歩き？になってしまうかもしれないんですけど、うん、でもまあ飽きずに、なんかもういろんな物がこう、いっぱいあるってゆう感じなので、まあ、あの辺かな」

（JJJ33）（対話）

また、【A−1】においても、異なる特徴が見られる。学習者による【A−1】の使用は、自発的に使用しているかどうかの判断が難しいものがあった。例えば、例 16 では、対話の協力者（<C>）が、意見をいう時に「便利になってるかもしれませんよ？」と一回カモシレナイを用いており、学習者はそれを受けて回答する際にカモシレナイを使っている。つまり、無意識に協力者の言葉を反復してカモシレナイを用いている可能性がある。このような例が、全体の 23.1%（26 例のうち、6 例）を占めていた。母語話者の場合、そのような例は見られず、すべて（全 10 例）自発的に用いられているものであった。

（16）<C>「でも、十年二十年後は田舎のほうもこう発展して、便利になってるかもしれませんよ？」

<K>「はい、そうかもしれませんけど、うーん、いつまでも、都会とは違うと思いますね」

（CCH34）（対話）

最後に、学習者による【B】は、例 17 のような、「婉曲的に自分の意見を言う」際に使われるものは少なく（21 例のうち 2 例で 9.5%）、例 18 のように、「無理」といった否定的な意味を有する語とともに使われる傾向が見られた（21 例のうち 19 例で 90.5%）。

（17）<C>「じゃあ、ちょっと今度は、えっと十年後とか二十年後に、住むとしたら都会と田舎とどっちがいいですかー？」

<K>「んー私はたぶん都会に住みたいだと思います、私は田舎あまり好きじゃないから、私のふるさとも田舎だったけどー、あまりーな、何もない所ですから、都会のほうがいいかもしれないです。（…後略）」

（GAT24）（対話）

（18）<C>「その時はちょっと忙しいのでー、その時は出てきてもらえると嬉しいんですけど、その時も今月の末も忙しいですか？」

<K>「はい、えっと、期末試験は、なんかえっと、同じー、お、同じ時ーで、同時にあって、なんか私も、手伝いたいと思いますが、それは、無理かもしれないです。私が、ここに来ても、一生懸命仕事にできないと思います」

（TTH37）（ロールプレイ・依頼）

4.3 使われる場面別に見られる特徴

使われる場面（タスク）別に使用実態を示すと、表5のようになる。タスクを「ロールプレイ」、「対話」に分けて母語話者の使用実態と比較した結果、母語話者の場合、話の内容についてより自由に話せるタスクである「対話」でカモシレナイを使用している傾向があったのに対して、学習者の場合、一つの項目に集中して使用されている傾向が見られず、テーマが予め設定されている「ロールプレイ」でも「対話」と同じような頻度で使われていた。

表5. タクク別の使用実態

		学習者		母語話者	
		出現回数	使用人数	出現回数	使用人数
ロールプレイ	断り	27 (35.5%)	25 (35.2%)	3 (7.7%)	3 (12.5%)
	依頼	9 (11.8%)	9 (12.7%)	3 (7.7%)	3 (12.5%)
対　　話		40 (52.6%)	37 (52.1%)	33 (84.6%)	18 (75.0%)
総計		76 (100%)	71 (100%)	39 (100%)	24 (100%)

「ロールプレイ」だけに注目すると、学習者と母語話者の使用実態には大きな違いが見られた。「ロールプレイ」には、「依頼」と「断り」の二つのタスクがある。「依頼」と「断り」のいずれも、フェイス侵害行為が起こりやすいと思われる場面であるにもかかわらず、母語話者の場合、「依頼」と「断り」とでは、婉曲表現として使用されるカモシレナイを予想より、用いていないことがわかった。一方、「断り」における学習者の用例には、ある特徴が見られた。断りの意を表す学習者の用例を見ると、例19のように、「無理」など、否定的な意味を有する語とともに用いられているものであった。日本語の会話教科書[7]の中には、日本人が相手の好意を断る際には、「はっきり断る言い方をあまりしない人が多いようだ」と指摘しながら、「難しいかもしれない」といった表現は断り表現だと指導しているものも見られる。しかしながら、「断り」における母語話者による使用実態を観察してみると、実際には例20のように、カモシレナイだけではなく、「～と思う」など、多様な表現を用いて断っていた。ここから、学習者の場合、他の表現を使ってもいいところで、ある一定の特徴を持つ語とともにカモシレナイを比較的多用している傾向があることがわかる。

（19）<C>「今ねー料理を作る人がね、一人、辞めたので、 来月から接客の方じゃな

くて料理を作る仕事を、担当してくれませんか？」

<K>「えー、私はあのー、全然あのー料理がー苦手ですからー、えーちょっとーねえすちょっと無理かもしれません。」

（FFR10）（ロールプレイ・断り）

（20）<C>「急にね調理の人が辞めてしまって、今すごく困ってるんですよー、人手が足りなくなってしまってーなのでＪＪさんちょっと調理の方（ほう）に入っていただきたいんですけどどうですか？」

<K>「あのーお野菜を洗ったり切ったりであれば、まあだいじょぶですが、ただあのー、調理、全般はすごく苦手なので、えー長くその仕事をするとゆうのはあのー自分には難しいと思います」

（JJJ05）（ロールプレイ・断り）

V　おわりに

以下、これまで述べてきた、学習者による婉曲表現としてのカモシレナイの使用に見られる特徴をまとめる。

①学習者によるカモシレナイの使用は婉曲表現以外での使用が 9 割以上であった。また、使用人数を見ると、カモシレナイを使っている学習者は全体の 41.8%である。この 41.8%のうち、婉曲表現としてのカモシレナイを用いている学習者は 15.6%しかいなく、母語話者（50%）に比べてかなり少ない。

②学習者の日本語能力別に見ると、【A】、【B】のいずれにおいても、学習者の場合、中級後半～上級前半から使用が増加する傾向にある。なかでも、【A】の【A−2】の場合は、上級以上の学習者に使用が集中している傾向にあった。また、複数の婉曲用法を産出した学習者が見られたが、その中の 7 割程度は上級以上の学習者であった。

③学習者による【A】の【A−1】では、相手が発したカモシレナイの提示を反復しているようなカモシレナイの例も少なからず見られた。学習者による【A】の【A−2】では、自己「評価」や発言内容に対する「評価」を予告的に言うものがほとんどであった。それに対して、母語話者による【A−2】では、「評価」に関する予告だけではなく、「聞き手私的領域への配慮」を表すものもあった。また、予告のほかに、「補充・譲歩」としても多く使用されていた。

④タスク別に見ると、断りタスクにおいて、学習者はカモシレナイを「無理」「難しい」などといった否定的な意味を有する語と用いており、断りの表現として使っていた。一方、母語話者は同じ状況でカモシレナイをそれほど使っていなかった。ここから、学習者は、他の表現を使ってもいいところで、ある一定の特徴を持つ語とともにカモシレナイを比較的多用している傾向があることがわかった。

以上のことから、学習者による婉曲表現としてのカモシレナイの使用は、使用されていたとしても、意味・用法、日本語能力、使用場面のいずれにおいても限定的であることがわかる。

本研究では、母語話者の使用実態と比較しつつ、学習者による婉曲表現としてのカモシレナイの使用実態について考察を行った。しかし、次のような課題が残っている。婉曲表現としてのカモシレナイがあまり使われていない要因として、同じようなことを他の表現で表している可能性があるかもしれない。例えば、相手と違う意見を述べる場面で使える「そうかもしれないが…」について、復文の産出に慣れていない初級や中級の学習者は「そうかもしれないが…」の代わりに「そうですね。でも…」を使っている可能性がある。今後は、「議論」「断り」など、婉曲表現としてのカモシレナイが使えるような場面において、カモシレナイではなく、他のどのような表現が使われうるのかについても合わせて考察を行っていきたい。

（神戸大学国際文化学研究科博士後期課程）

注

1) カモシレナイの基本的な意味については、さまざまな立場がある。①「蓋然性判断」「推量」を表すもの（仁田 1991、平田 2001 など）、②「可能性判断」を表すもの（三宅 1992 など）、③「推量」「可能性判断」が併存するとするもの（グループ・ジャマシイ 1998、山岡 2016）があるが、本研究では、カモシレナイの基本的な意味を「可能性判断」とする。

2) 海外教室環境、国内教室環境の学習者を分けて分析したところ、カモシレナイの使用傾向について大きな差が見られなかったため、本研究では分けずに扱った。

3) J−CAT のレベル判定の目安は今井（2015）を参照した。

4)「予告」全般については蓮沼（2017）での用語を援用しているが、本研究の分類基準や命名などとは異なっている。蓮沼（2017）では、婉曲表現としての「カモシレナイ」を「文末用法」と「前置き用法」に二分し、「前置き用法」をさらに「話し手の認識に対する前置き」、「聞き手の認識に対する前置き」、「話し手の発言に対する前置き」の三つに分類した。

5) 発話が不連続であり、意味・用法の判断がつきにくい例や、「婉曲表現ではない」、「婉曲表現」の間で判断がゆれた例については「その他」として分類した。

6) 学習者の人数は統計的に調整されてはいないが、傾向としては、明らかに、習熟度が高い学習者ほど婉曲表現としてのカモシレナイを使っていることには変わらない。

7) 『会話に挑戦!中級前期からの日本語ロールプレイ』（2005）、p.37. スリーエーネットワーク

参照文献

麻生夕美（2002）「推量表現『カモシレナイ』が婉曲表現として使用される際の機能分類について－日本語教育の立場から－」『北條淳子教授古希記念論集』、pp.1−12. 早稲田大学日本語研究教育センター初級教科書研究会

今井新悟（2015）「J−CAT（Japanese Computerized Adaptive Test）」李在鎬（編）『日本語教育のための言語テストガイドブック』pp.67−85. くろしお出版

川口さち子（2003）「カモシレナイの『可能性明示』――『意味』『文脈』『機能』の記述――」『聖学院大学論叢』、15 巻第 2 号、pp.57-65.

國澤里美（2013）「語用論の観点から見た認識のモダリティ形式『カモシレナイ』について」大葉大学応用日語学系学術検討会発表、pp.1−17.
グループ・ジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
迫田久美子・石川慎一郎・李在鎬編（2020）『日本語学習者コーパス I-JAS 入門』くろしお出版
高木祐輔（2017）「『ソウカモシレナイ』の婉曲的用法 —対話における機能に注目して—」『一橋日本語教育研究』5 号、pp.31-40.ココ出版
仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房
仁田義雄（1992）「判断から発話・伝達へ—伝聞・婉曲の表現を中心に—」『日本語教育』77、pp.1-13. 日本語教育学会
蓮沼昭子（2017）「『カモシレナイ』と『ヨウダ・ミタイダ』の婉曲用法－認識的モダリティの類型的相違がもたらす振る舞いの対照性－」『日本語日本文学』27 号、pp.1−26.
平田真美（2001）「『カモシレナイ』の意味－モダリティと語用論の接点を探る－」『日本語教育』108 号、pp.60−68. 日本語教育学会
三宅知広（1992）「認識的モダリティにおける可能性判断について」『待兼山論叢　日本学篇 26』、pp.35-47. 大阪大学大学院文学研究科
山岡政紀（2016）「『カモシレナイ』における可能性判断と対人配慮」小野正樹・李奇楠編『言語の主観性：認知とポライトネスの接点』pp.133-150. くろしお出版
Brown, P., & Levinson, S. C.（1987）. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.（田中典子監訳　（2011）『ポライトネス言語使用におけるある普遍現象』研究社.）

調査資料及び用例出典

『多言語母語の日本語学習者横断コーパス』
（https://ninjal-sakoda.sakura.ne.jp/lsaj/）（最終閲覧日：2022 年 9 月 1 日）
角田光代（2007）『対岸の彼女』文春文庫
立花隆・東京大学教養学部立花隆ゼミ（1998）『二十歳のころ』新潮社
又吉直樹（2017）『火花』文春文庫
村田沙耶香（2016）『コンビニ人間』文春文庫